

# 図画工作科・美術科のTT授業を通しての現地職員への指導と連携

前リマ日本人学校 教諭

神奈川県横浜市立都筑小学校 教諭 高田 香織

キーワード: 現地職員への指導と連携、コミュニケーション、共同教材研究、図画工作科・美術科教育

## 1. はじめに

私は、派遣期間中、全校の図工・美術担当になり、現地職員とTTの授業を行うことになった。技能教科の図画工作科・美術科（以下、図工・美術）は、担当教員が必ずしも派遣されるとは限らないので、当時のリマ日本人学校でもペルー人の現地職員が授業を行っていた。しかし、日本とは異なる現地の教育を受けてきた言語の違う現地職員が、日本の学習内容を知った上で子どもたちに教えることは容易なことではない。しかし、日本人学校の目的である、日本と同等の教育を行うことためには、指導する側が指導内容を理解し、指導力を向上させていくことが必要不可欠である。派遣教員は、3年程度しか在外教育施設にはいられないが、それよりも長く学校に携わることができる現地職員への指導は日本人学校の教育にとって非常に重要である。

よって、今回私の3年の派遣期間の間に現地職員に日本の図工・美術教育の考え方・指導方法を伝え、現地職員が一人でも日本式の授業ができるように指導することにした。そして、TTの授業では、派遣教員と現地教員が共通の指導観をもって授業をすることを意識して行うようにした。

## 2. 主な現地職員への指導とその成果

### (1) 現地採用職員への指導内容

1年目	2年目	3年目
①授業についての指導 ・教材研究の仕方 ・道具の扱い方 ・導入、場の設定の工夫 ・児童生徒へのかかわり方 ・評価の仕方	①授業実践を積む ②校内研究授業での派遣教員とのTTの授業発表	①学習指導要領の図工・美術について知る ②自主校内公開授業

### (2) 具体的な手立て（・）と成果（○）

#### ①打ち合わせ時間を確保する

- ・派遣1年目から毎週1時間、空き時間に授業や指導について打ち合わせをする時間を確保する。
- ・打ち合わせでは、その週の授業の振り返り、一緒に教材研究をする。学習指導要領の内容を説明する際には日本語・スペイン語を話せる現地職員に通訳として入ってもらう。

○3年間通して行ったことで、共通の指導観をもつことができた。定期的に打ち合わせをすることによってPDCA（Plan・Do・Check・Action）サイクルがよくなった。

#### ②コミュニケーションをはかる

- ・コミュニケーションをはかるために、私自身もスペイン語を覚え、使うように心がける。
- ・授業でよく使う日本語のフレーズの表を作成し、覚えてもらう。
- ・学校の空き時間や学校外で進んで話す機会をつくる。

○現地職員と意思疎通が徐々にはかれるようになり、打ち合わせがスムーズになった。

○学校の授業だけでなく、日常生活での出来事などのことも気軽に話せるような関係ができた。お互いの文化について紹介し合ったり、感じたことを話したりする中で心の距離も近くなり、言語への理解も深まった。

### ③一緒に教材研究をする

・各学年で使用する道具の扱い方、注意点を知らしてもらうため、実際にやってみせて見本を示し、試してもらう。



教材研究の様子

○安全や環境への配慮ができるようになった。「どうしてこのやり方をするのか」、「正しいやり方ではない場合どうなるか」を具体的に理解できるようになった。

・模擬授業で教師役と子ども役に分かれ、実際の授業を想定して準備を進める。

○模擬授業で様々な想定をイメージできるようになり、自信をもって授業に臨めるようになった。

・黒板掲示用の掲示物は、こちらが作り、現地職員は、日本語での言い方をローマ字で書いたり、メモをしたりした。複雑な文は、スペイン語・日本語2か国語が話せる事務職員に通訳をお願いし、現地職員が理解できるようにする。

○授業のめあてやその授業のポイントとなる事項を理解し、それらをおさえて授業をするという意識をもたせることができた。

・単元ごとに参考作品として試作を作ってもらうようにする。

○制作の途中どこで子どもたちがつまずきやすいか、どのように教えると子どもがわかりやすいかをみつけられるようになった。子どもたちも教師の作品を見ることで、やり方などがわかりやすく理解でき、子どもたちにも好評であった。これが現地採用職員と児童生徒との信頼関係を築くきっかけにもなったと感じる。

### ④授業実践、授業公開をする

・派遣1年目は、派遣教員がT1、現地職員がT2、派遣2年目から徐々に現地職員がT1、派遣教員がT2となり、授業実践を繰り返す。



自主授業公開の様子

○派遣2年目、校内研修で研究授業をして他の職員にも授業を参観してもらい、授業改善に努めた。このことが現地職員の自信と、指導力向上にもつながった。そして他の職員にも現地職員の熱意や指導技術の成長を認めてもらうことができた。派遣3年目は、現地職員が指導案を考え、自主的に授業を公開し、校長先生にも授業を参観していただいた。

・授業後は、すぐに現地職員に授業の良かったところ、改善したほうがよいところを確認し、最初に自己分析を行ってから、こちらが気づいたことを言うようにした。その際は、よかったところをしっかりと伝え、改善すべきところは具体的に説明する。

○自ら授業の良かったところと改善点を見つけ出す力がついてきた。次の授業に生かそうとする姿勢が見られるようになった。子どもたちの実態に応じた指導の必要性を感じ、どんな時にどんな指導をしたらいいか柔軟に考えられるようになってきた。

#### ⑤その他

・現地職員への指導内容や成長を他の職員や保護者に伝えるように心がける。

授業をするにあたって、現地職員がしっかりと準備をしていることを子どもたちや保護者に話したり、毎年発行する校誌「インカ」に現地職員の授業への取り組みを紹介する文章を載せたりする。

○言葉の壁はあるが、授業中子どもたちに教師の意図や思いを感じ取ろうとする姿勢が見られるようになった。

校誌は、子ども、保護者、運営委員の方々など学校にかかわる全ての人に配布される。日本人学校の現地職員への指導と現地職員の取り組みを理解し、協力していただけるような雰囲気を作ることができた。

### 3. 授業での現地職員への指導と連携

実際に実践した授業の一部を紹介する。

#### (1) 実践① 外部講師を迎えた、生活に使える焼き物をつくる体験活動（全校児童生徒対象）

・事前に現地職員に校内でひもづくりやてびねりなどの技法を教え、試作品を作る活動をした。

また、休日を利用して、講師の寮のある場所と一緒にいき、直接講師に指導してもらった。

・絵付けの際には、現地職員と一人ひとりの子どもたちの様子を確かめ、日本語での声かけが難しい児童には、現地職員がスペイン語で声をかけるなどした。梱包や文化祭での展示は一緒に行い、展示方法の仕方や注意点などを指導した。

#### (2) 実践② シャボン玉の泡の形や色から想像したこと、感じたことかを絵に表す活動（低学年対象）

・事前準備で一緒に色のついたシャボン液セットを作った。

・授業の導入での子どもたちとシャボン液との出会わせ方を一緒に考え、現地職員から子どもたち宛てにシャボン液の使い方を手紙が届いたという設定で、授業を始める流れにした。デモンストレーションは、簡潔に、わかりやすく行うよう伝え、模擬授業を繰り返し、授業に臨んだ。

・泡のできた形を見立てる活動では、子どもたちの考えを肯定的に受け止めるようにし、一人ひとりと対話をし、ていくようにした。

#### (3) 実践③ 現地の民族の模様のかき方を参考にして思いのままにペンで模様をかき、絵に表す活動（中学年対象）

・授業では、分担して机間指導を行った。細かい作業を苦手とする児童やイメージがわからない児童への対応などを授業後に話し合った。

・子どもたちが制作に行き詰った場合は、途中で一度作品を黒板に貼り、遠くから眺めることで作品全体を把握したり、新しいイメージを生み出したりできることを伝えた。

#### (4) 実践④ 子ども学芸員として、文化祭で展示している全校の作品を来校者に伝える活動（高学年対象）

・言語の違いから現地職員と教員・児童とが、作品を見て思ったこと、感じたことを伝え合うことの難しさを感じた。鑑賞の授業に関しては、派遣教員が主導で授業をした。もし、現地職員が授業を行う場合には、通訳が必要であるとの共通認識をもった。

#### (5) 実践⑤ 文化祭でのライブペインティングのパフォーマンス（高学年対象）

- ・児童に大きな紙に描く際の筆遣いの注意点を気づかせるために現地職員がデモンストレーションをした。
- ・デモンストレーションの際は、全児童に見やすい位置で行い、児童が大切なところに注目するようにジェスチャーを交えるなどの配慮をするよう伝えた。
- ・児童にとっては、初めての活動で不安を感じながら制作していたので、失敗を恐れず、思い切り行うことを意識できるよう、声かけの内容を確認して一緒に授業に臨んだ。

#### 4. 今後の課題

日本人学校の現地職員の給与は、時間制でそんなに多くはない。ペルーでは給与面でよい仕事が見つければ職を変えるということがしばしばあるので、日本人学校にはなかなかよい人材が集まりにくいという課題がある。そんな中で資質・能力が高く、有望な人材を確保し、育成するためには、現地職員が日本人学校で働く良さを感じられるように、仕事がしやすい環境づくりと現地職員に対するサポートが何よりも大切である。そのためには言語の壁からかわりづらさがあると思うが、教員間の間でもそれを打破するような学校の風土をつくっていく必要がある。派遣教員は、それぞれ志をもって海外に来ていると思うが、個人の目標達成だけでなく、現地職員の指導教官のような仕事の必要性、有用性を理解し、管理職を中心として学校全体で取り組むべき課題だと認識しなければならないと考える。私の代での一過性のものにするのではなく、今後も他教科の現地職員への指導も含めて、継続していくことが、日本人学校が日本と同等の教育をしていく上で大切なことだと思う。

#### 5. まとめ

現地の先生とのTTの授業を通して、自分に新しい視点が見えた。それは、教員の育成という視点である。派遣教員と同じように現地職員が日本の教育の考え方を知った上で授業を行うためには、しっかりと派遣教員が時間をかけて指導する必要がある。そのために打ち合わせの時間を確保することは必須であると思う。今回私が大事にしたことは、「一人の人間として自ら心を開き、相手を知ろうとする気持ちをもつこと」と「一緒に考え、一緒に活動すること」だった。この3年間、電子辞書片手に必死にたどたどしいスペイン語と身振り手振りで毎週現地の先生と一緒に教材研究をし、授業を行った。現地職員の先生は、そんな私のことをじっと見て根気強く話を聞いてくれた。そして、日本語で「わかりました！」と笑顔で応えてくれた。毎週打ち合わせをしていくと彼女も独学で日本語を勉強して、話せる日本語を増やしていこうとしているのがわかり、私と彼女の心の距離が縮まっていく気がした。そして今では、空き時間や授業の前に早く学校に来て参考作品を作ったり、子どもたちへの日本語での声かけの言い方を練習したりして、それを授業で実践している姿も見かけるようになった。彼女の努力が徐々に実を結び、子どもとの信頼関係もできてきている。現地職員の中には、素直で熱意はあるが、指導方法を知らずに授業をしていることがある。派遣教員個人個人の日々の授業の準備も必要だが熱や長い目で見れば、派遣教員よりも長い期間学校で働くことができる現地職員を指導することは在外教育施設の教育活動上必要不可欠で、学校全体一丸となって取り組まなければならないことだと思う。

日本人の子どもたちのために一生懸命日本語を覚え、言葉の壁や教育の違いも乗り越えようとする彼女の姿勢を見て、勇気をもらい、私ももっとしっかりしなければという気持ちになった。この派遣期間の間、現地の先生と一緒に授業ができたことは、私にとって大きな財産である。帰国後は、中堅教員として若手教員の校内の人材育成にかかわる立場になってくる。その際は今回の経験を生かし、自分にできることをしていきたい。